

修身初訓

四

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

登錄 番	第	號
門 部		
養 育		
次		
全	冊ノ内第	冊
分類 番	第	號
154		

T 1A1  
22  
Mi 77

1

1

福冊  
學  
範  
印

修身初訓卷之四

緒言

斯編ハ、第三年後期ニ授クル所トス、  
載ル所交際ニ起テ、尊師處世、生業倫  
常ノ五ツトス、初等修身、終ナルヲ以  
テ、其目ヲ増益シテ、稍其科ヲ完備  
スル者ナリ、

明治十五年

編者識

修身初訓卷之四

宗 盛年編輯  
宮本茂任校閱

第一章

○曾子曰く君子ハ文を以て友を會ハ友を以て仁を輔く

○子貢友を問ふ孔子曰く忠告して善く之を道き不可あらハ則止む自辱うまむること

となかれ

○孟子曰く長を挾まず、貴を挾まず、兄弟を挾まずして友とす、友の其徳を友とするか、  
是以て挾むことあるべからず

○孔子曰く益者三友、損者三友、直を友とす、  
諒を友とす、多聞を友とするは益なり、便辟  
を友とす、善柔を友とす、便佞を友とするは  
損なり。

○大夫士相見ゆき、貴賤敵せずと雖も主

人客を敬まへ、則先つ客を拜す、客主人を  
敬まへ、則先つ主人を拜す、主人問はさき  
に客先つ舉げす。禮記

○君子人の歡を盡さず、人の忠を盡さず、  
以て交を全うするあり。同上

○君子能あき、則寛容易直なり、  
以て人を開き、道ひく不能あき、則恭敬縛紕なり、  
以て人は畏れ事ふ。荀子

○人の我は不義無禮なるを、怒り恨むべし。

らすこそ人の過ちをきハ我ふあづからハ  
何ぞ怒り恨んで彼をと其是非を争ふ可ん  
や只我身を顧み修むハ人を咎むるふいと  
まゐハ大和俗訓

①人ふ交るふ言少く事を勤め謙遜ゆて  
吾才ふ矜らす人を侮らす謗らハ又怨み咎  
めハ世變を知りて時宜は應ふ信義を守り  
て約を變せず身をいささよくて財利の  
汚かけきハ行處とて人の惡を譏るまと

あハ同上

●己の陰事宜く人の之を説ふ任すへト人  
の陰事我々則説へからハ我の爲す所只是  
一誠なまハ則實に陰陽の別なきのい言志書録  
○人と事を共ふするふ渠快事を擔ひ我苦  
事ハ任さきハ事ハ苦と雖意ハ則快ト我快  
事を擔ひ渠苦事を任されハ事快トと雖意  
ハ則苦ト言志晚錄

○今の朋友ハ其善柔を擇んで以て相與す

肩を拍ち袂を執りて以て契合とす一言合  
はさきハ怒氣相加ふ朋友の際其相下る倦  
まさらんことを欲す自警編

○五井持軒平生曾て人の惡を言つゝ或ハ  
人と語り言或ハ當らさきハ亦大きを斥け  
ゑ但曰く某解せざる所閩閩鄙俚の言解せ  
ざる所多ト曾て人ト謂て曰く某胸中未嘗  
て一惡念を蓄へず又曰く人惡をすること  
能ハざる者あり一書生あり遽ニ曰く吾輩

然ること能ハず持軒色を正うて曰く意  
ハさり未君の人とかりの爾らんとハ惡若  
し作す可んハ試ム之をせよ

○程明道終日端坐ト云泥塑人の如ト人ト  
接するふ至るふ及んてハ則渾て是一團の  
和氣

○韓琦宗族を合とて百口衣食均等異ある  
所あり孤女十餘人を嫁す諸姪を養育して  
已子比す得る所の恩例先つ旁族ト及

何事不計  
ほす其終ふ逮んで子褐衣ゆいで未だ命せ  
らるる者あり祖考を追孝ふ養ふ及ハ  
さるを恨む塋域を奉するふと甚厚ふ五世  
の祖の家より皆訪ふて之を得たる田を其  
旁に買ふて松檟を植ゑ人を召して之を守  
視せしむ貴顯五十年身將相として累りふ  
大賜予と更たり其歿ふ及んでや庫に羨錢  
あり室に奇玩あり頼ひふ天子金帛を賜ひ  
官葬資を出す喪事以て乏きこと無きこと

を得たり

○范文正參知政事とある時諸子に告て曰  
く吾呉中の宗族甚た衆し吾に於てハ固よ  
う親疎あり然きとも吾祖宗より之を視  
るハ則均く是子孫ゆいで固より親疎あり苟  
も祖宗の意に親疎なけきハ則飢寒の者吾  
安んず恤ふさることを得んや  
祖宗よりこのかゝる徳を積むこと百餘年  
して始めて吾に發して大官に至るふとを得

たり若し獨り富貴を享けて宗族を恤す  
んハ異日何を以て祖宗ハ地下ハ見え今何  
の顔ありて家廟ハ入らんやと是ハ於て恩  
例俸賜常ハ族人ハ均ク分ち并ハ義田宅を  
置くと云ふ

### 第二章

○師ハ道を傳へ業を授け惑を解くものな  
り人生きて之を知る者ハ非ず孰ク能ク惑  
なからん惑ふて師ハ従ハず其惑たるや終

ハ解けず 韓退之

吾ハ前ハ生きて其道を聞クや固より吾ハ  
り先ハきハ吾従て之を師とせん吾ハ後ハ  
生きて其道を聞クや亦吾より先ハれハ吾  
従つて之を師とせん吾ハ道を師とするか  
り夫き庸ク其年の吾より少長なるを知ら  
んや是故ハ貴となく賤となく長となく少  
となク道の存する所ハ師の存する所あり  
同上



○我を非として當る者ハ吾師なり、我を是として當る者ハ吾友あり、我ハ諂諛する者ハ吾賊あり、故ハ君子ハ師を隆んて友を親み、以て其賊を惡むことを致す、善を好んて厭ふことなく、諫を受て能誠しむ、進むことかからんことを欲すと雖、得んや、荀子

○天の人を生するや、其耳を以て以て聞く可らしむ、學ハされハ其聞く聾ハ若うす、其目を以て以て見る可らしむ、學ハされハ其

見る盲ハ若うす、其口を以て以て言ふ可らしむ、學ハされハ其言爽ハ若うす、其心を以て以て知る可らしむ、學ハされハ其知る狂ハ若うす、故ハ凡そ學ハ能益すハ非るあり、能天の生する所を全ふして、之を敗ることなくす、是を善く學ぶと謂ふ、呂氏春秋

○民ハ三ハ生る之ハ事ある、一の如くす、父と母を生み、師と友を教へ、君と父を食ふ、父と母とを食ひ、非されハ長とあらす

教ふ非ざるハ知らず生るの族なる故一ふ之小事  
一唯其在る所なきハ則死を致す 國語

○木下順菴少して某侯に從ふて江戸に來  
る志を得ずして京に歸る是より戸を閉ぢ  
て書を讀む久うして名海内を震ふ加賀侯  
幣を厚ふて之を召す辭して曰く先師松  
永先生の子某嗣ひて家學を承け未仕途に  
就ず家道屢に空し請彼を用ゐて以て其宿望  
を得せしめよ侯は之を聞て曰く今の世交

り手足の親も同じく誼金の固きふ比する  
も利害の關する所ふ於てハ則崖岸相向者  
比く皆然り順菴の如きハ古人の節ありと  
謂ふべし即松永氏の子と俱ふ之を禮聘す  
○會津天寧寺町に與兵衛といふ漆工あり  
少き時又右衛門と云ふ者を師として習得  
たり又右衛門年七十ふあり起居心も仕  
す家業を營むもやあたらず一人の男  
子ありきとも多病なり恒の産あけきハ父

を養ふの術なく  
朝夕の火を擧る  
を得さらんとす  
與兵衛も家貧よ  
一で餘糧あるふ  
非きとも其貧窮  
小苦むを見るふ  
忍びす辛苦して  
我う家の傍ふ一



室を設け又右衛門を迎へて子の父母小事  
るう如く朝ふ氣色を問ひ夕ハ寢るを待て  
退ふ時ありてハ世間の物語をも一で徒然  
を慰め日々の飲食を進むるふも自ら陪侍  
一師食一終らされハ時刻移きとも妻子ふ  
食せしめは

家貧一けきとも勞費を厭はきんおとを恐  
きで日用乏一からさる情態をな一、家業の  
賣買小利を得きハ先初穂ありとて珍ら一

修身訓言 卷之四 修身訓言  
き物をもやめて師ふ食せしめ師の父母の  
年忌ふハ法會を修することハ云ふを待す  
月々の忌日ふハ共ふ精進ハ或ハ又右衛門  
親族朋友の家ふ行ふ又寺ふ詣て神ふ祈ら  
むといへハ手を携へて共ふ行ふ凡何事も心  
ふ違ふことなく痛りり仕ふきハ又右衛門  
ハ妻子と與ふ在し時よりハ快樂を覺えか  
れ親しけり聞く人與兵衛ハ師ふ事ふること  
との懇切あるを感嘆せり元文元年藩主よ

ミ米若干を與へて其善行を賞せらる

### 第三章

○孔子曰く居處恭し事執るふ敬ふ人と與ふするふ忠ある夷狄ふ之くと雖棄つ  
へからん

○書ふ曰く其善を有すれハ厥善を喪ふ其  
能ふ矜きハ厥功を喪ふ惟事を事とすきハ  
の備あり備あきハ患あり

○范忠宣子弟を戒めて曰く人至愚と雖も

人を責ることゝ則明うふ聰明ありと雖も  
已を恕することゝ則昏し爾う曹但常ふ人  
を責る心を以て已を責め已を恕する心ふ  
て人を恕せし聖賢の地位ふ到らざるこや  
を患へざるなり

○君ふ事あるまゝと親ふ事あるう如く官長  
ふ事あること兄ふ事あるう如く同僚は與  
あること家人の如く群吏を待つこと奴僕  
の如く百姓を愛あること妻子の如く官事

を處すること家事の如く然る後能く吾心  
を盡す如く毫末も至らざることあるは皆  
吾心未だ盡さざる所あるなり 呂氏童蒙訓

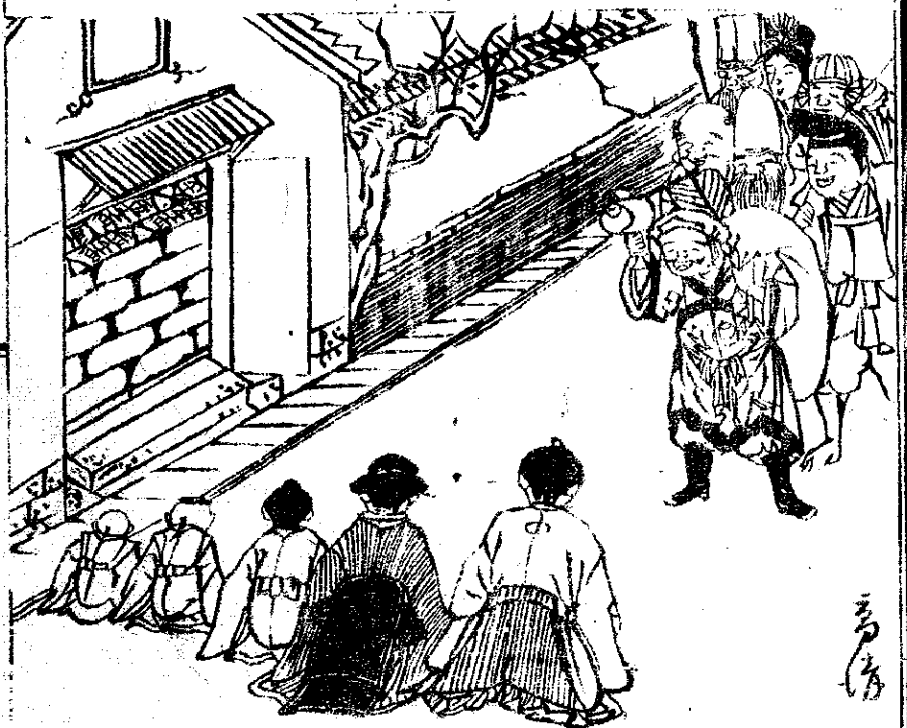
○官長を視ることゝ父兄の如く敬順を主  
とすへし吾議も合はざるあれは則姑く  
前言を置ま他を賛けて商思すへし竟ふ不  
可あきし則苟従すへさふ非す必和悦ふし  
て敢て易慢の心を生ぜざるへし 言志晩録

僚友ふ處する能く肝膽を披瀝し視ること

同胞の如くすへゝ面従すへからばと雖而  
も亦乖忤すへからず黨ある所ある不可あ  
り、挾む所ある不可なり、媚疾ある所ある最  
不可あり、同上

人の事を做す、其事ふ就き、自ら我量と才と  
力との及ふ可きを揆り、又事の緩急と、齡の  
老壯とを相比照して後做起すへゝ然らずし  
て妄意手を下す殆ど狼狽をよぬかき、同上  
○奴阿り日ふ一酒店ふ來り酔飽し暗ふ錢

貨を投ず、大率三  
五倍がくの如き  
こと數句主人異  
く之ふ問ふて曰  
く、君毎ふ予を  
て厚利を得せし  
む、抑君の姓字を  
何とかある奴笑  
て曰く、吾主翁ハ



金匱あり吾貨を視る瓦礫ふ侔き所以あり  
然きとも其名ハ則吾敢て言はず主人曰く  
懇款此に至る願くハ君隱こと勿き奴曰く  
吾居る所を七福街と曰ひ主を大黒天と曰  
ふ常ふ金櫃を執り之を揮ひ貨を出す罄竭  
あることあり是ふ於て主人憮然とて間  
くありて曰く吾大黒天を禱ること久し一  
たい之を拜せんと願ふ知らず得へけん  
奴難む色あり後數日來り謂て曰く子必あ

きを見んこやを欲せハ盡く家人奴婢を屏  
けハ則得ん主人欣然とて曰く謹んて教  
の如くせん乃期を刺して以て去る期の夕  
奴來り言て曰く主翁將ハ寅夜を以て來ら  
んとハ宜く藏を開ひて以て待つへハ將ハ  
汝ハ福を賜ふんとす主人大ハ悦ふ雞初め  
て鳴き星斗爛然遙ハ行燭數點遠きより至  
るを見る稍近つく乃戸を出て膜拜す既  
入る倏然とて猛奮し主人を楹ハ縛し悉

仙身新語 卷之四 通身言機  
く貨物を奪ふて以て去る 隔靴論

#### 第四章

○民生の勤むる不在り、勤むるに則て匱乏ならず、  
左傳

○勞苦と樂み、本業と營め、その後衣食が  
ならに餘り有り、口腹をほしひまや逸  
樂とこやしすれ、其後衣食かあはに貧窘  
す、天子はらざるなり、人ふあらざるなり、自  
らこれと取るなり、畜德錄

○人生世に於て、未だ心力を勞せざる者、何  
らに或る心と勞して力を勞せば、或る力を  
勞して、心を勞せば、若し心を勞せず、又力を  
勞せざれば、乃ち饑寒無用の人あり、紳瑜

○世の人、耳視目食せざるもの、鮮に衣冠に  
以て容觀をする所あり、體に稱へば斯美に  
世人其稱ふ所を捨て、人の尚ふ所を聞て  
之を慕ふ豈耳を以て視る者、非らずや、飲  
食に以て味をなす所あり、口に適へば斯善



ト世人菓餌を取りて之を刻鏤ト之を朱緑  
ふト以て盤案の玩とかす豈目を以て食ふ  
者ふ非すや 自警編

○人の家居ハ貧富ふよらず身分より少  
せばまろよトせむけきハ費え少かく事少  
くして住よト富貴ありとも無用の屋作廣  
くすへからハ掃除のつとめ繁く修理もむ  
つかく財の費え多ト家道訓  
然きとも又無用の用とて常小用なき所少

ありてよ事有る時の爲なり家居ハ只  
堅くいさきよく飾あまふ心を養ひ目  
を養ふよト同上

家を治むる主人ハ日夜家事をよくつとめ  
で怠らすおろそかふなトハ財を用ゐるふ  
おごらすつひやさずもつとら儉約を行ふ  
へト勤と儉との二ハ家を治むる要道なり  
此二の道行つるきハ貧窮ふ至らず財用ふ  
ともーからず勤と儉と二の道を行ふ心

を小ふでおろ  
そかあらざるを  
よとす是勤儉  
を行ふ心法なり  
同上

○北條時頼自奉  
すること人の堪  
へざる所多し大  
佛宣時嘗て之を



詣る時已に深夜なり時頼一壺酒をとりて  
曰く子と之を與ふせんと欲す顧ふに女を  
有を得る所あらんと紙燭を照し度ふ索め  
碟に殘醬あるを觀て取て酒を佐く其儉薄  
此のことなり

○綾部道弘自ら處こと節儉華飾を喜ばず  
常人あり彩服を其子に遺ふ遂に服するこ  
とを許さず曰く先君貧素世に即く吾亦辛  
勤多年幸に俸資を享け兒女を煖養す是君

の恵あり、夫人情儉ふ難ふして奢ふ易い、予  
兒を愛せざるふあらざるなり、奢ふ習う  
めんことを欲せざるのみ

○趙簡子弊車瘦馬ふ乗り、殺羊裘を衣ふ、其  
宰進み諫て曰く、車新おき、則安し、馬肥き  
、則往來疾し、狐白の裘、温うゆいて且輕し、  
簡子曰く、吾知らざるふ非ざるお玉、吾おき  
を聞く君子善を服おき、益恭し、細人善を  
服おき、益倨ると、我以て自ら備ふ、細人の

心あらんことを恐るゝなり

○賈敦頤、貞觀中、滄州の刺史ふ遷る、職ふ在  
て清潔、入朝すること、小室を盡してゆく、唯  
車一乘、羸馬數疋、銜勒かくることおき、繩  
を以て之をおす、見る者、その刺史たること  
を知らざるなり

○張文節相とかり、自ら奉すること、河陽掌  
書記の時の如し、所親或はことを規いて曰  
く、今公俸を受ること少からず、而して自ら

奉するこや此の如く自ら信じて清約あり  
といふとも外人頗公孫布被の譏あり公宜  
く少く衆に從ふべし

公嘆して曰く吾今日の俸家舉つて錦衣玉  
食すと雖も何ぞ能はざるを患ふ顧ふ人  
の常情儉より奢ふ入ること易く奢より  
儉ふ入ること難し吾今日の俸豈能く常ふ  
あらんや身豈能く常ふ存せんや一旦今日  
ふ異あらば家人奢ふ習ふこと已ふ久く頓

ふ儉あること能はす必所を失ふふ至らん  
豈吾位に居り位を去り身存し身にひて一  
日の如くなるふ志かんや

### 第五章

○詩小曰く天烝民を生ず物あり則あり民  
の彛を秉る是懿徳を好むと孔子曰く此詩  
を爲る者ハ其道を知ざるか故に物ある  
ハ必則あり民の彛を秉るや故に此懿徳を  
好む

孟子曰、惻隱の心ハ仁あり、羞惡の心ハ義あり、恭敬の心ハ禮あり、是非の心ハ智あり、仁義禮智外より我を鑠すハ非ず、我固より之ありと思はざるのハ故、曰く求むきハ則之を得、舍れハ則之を失ふ、或ハ相倍蓰して算あることなき者ハ其才を盡すこと能はざるものあり。

○北條泰時人となり親族ハ敦ハ常ハ叔父時房を推して之ハ下ハ嘗て評定所ハ在リ

弟朝時の第ハ寇ありと聞キ輒起て赴き援け平盛綱曰く是小事のハ公重職ハ仕ハ何ぞ自ら輕するや、泰時曰く兄弟難あり、何ぞ小事と曰ふ、吾を以て之を視きハ建保承久二役と異リ擇ん苟も吾親を喪ハハ重職何を爲ん

○孟子曰く人の道あるや、食ハ飽き、衣を煖ム、居を逸して、教へなければハ則禽獸ハ近シ、聖人こそきを憂ふこと有て契を以て司徒

修身訓言 卷之四  
たりしめ教ふる小人倫と以てす父子親あり君臣義あり夫婦別あり長幼序あり朋友信あり

○張公藝九世同居す北齊隋唐より其門ふ旌表す麟德中、高宗泰山ふ封し其宅ふ幸し公藝を召し見て其能く族を睦む所以の道を問ふ公藝乃忍の字百餘を書して進む其意以爲らく宗族の協はさる所以ハ尊長の衣食或ハ均しからさることあり卑幼の禮

節或ハ備はらさることありふ由て更ふ相責望し不遂ふ乖争をある苟も能く相與ふ之を忍へハ家道雍睦に

修身初訓卷之四終